

T C W Tokyo Creative Weeks

www.tcw2012.jp



平成 24 年 12 月 13 日
東京文化発信プロジェクト
公益財団法人東京都歴史文化財団

東京文化満載のTCWが終了、その盛り上がりをご紹介！

昨年よりパワーアップし、10月10日（水）～31日（水）の22日間に開催された「東京クリエイティブ・ウィークス」。都内各地で実施されたプログラムの一部をご紹介します。

東京クリエイティブ・ウィークス前夜祭 10月9日（火）19:00～ 会場：渋谷WWW

トークセッション リリー・フランキー×YOU

Tokyo Creative Weeks Eve Talk Session Lily Franky & YOU

00

10月9日（火）、翌日からはじまる「東京クリエイティブ・ウィークス」の前夜祭が、渋谷のライブハウス WWW で開催されました。満員のお客様を前に、レイチェル・チャンさんの司会で、リリー・フランキーさんと YOU さんが東京の街や文化についてトークを展開しました。

「日本では映画や美術館の料金が高すぎる、大学生まではタダでいい」と YOU さんが思い切ったコメントをすると、「確かに外国に比べると高いかもしれないけど、実はそれでも東京は、世界で一番美術館に人が入る都市。多くの人が芸術・文化に触れたがっている」とリリーさん。さらに「東京では多くのイベントがあちこちで同時

に開催されている。内容は玉石混濁だけど、それができるのは東京みたいな巨大都市ならではの。それも東京の“文化”じゃないかな」と持論を展開。「それらをみんな、ひとつの通行手形で回って観られると面白いね」という提案に、YOU さんも賛同しました。加えてリリーさんは、「ネットなどで情報が供給され、現場に来なくてもわかる時代だからこそ、実際に見ると違いを感じる」と、自ら足を運ぶ重要性を強調。都内各地でイベントを開催する TCW への期待感にもじましました。さらに客席との質疑応答では、クリエイティブの本質は何かを直球で論じたりと、大いに盛り上がった前夜祭となりました。



プライベートでも仲の良い 2 人。100 名の参加者を前に、レイチェル・チャンさんの司会でトークショーが行なわれました。



若い人たちが映画やライブ、美術館に行きやすいよう、大学生までは料金を無料に、と思いついた提案をする YOU さん。



外国の方には、歌舞伎町のネオンが日本っぽいものとして見られていたり、日本人が気がつかない日本の文化もある、とリリー・フランキーさん。

東京発・伝統 WA 感動

東京大茶会 2012

Tokyo Grand Tea Ceremony 2012

10月13日(土)・14日(日)、「東京大茶会 2012」が浜離宮恩賜庭園で開催されました。さまざまな日本の伝統芸能・文化を国内外へ広く発信するとともに、次世代へ継承していくことを目的として実施している『東京発・伝統WA感動』のプログラムのひとつ。趣向を凝らしたユニークな野点も催され、子供たちをはじめ、普段、茶道に馴染みのない方や、外国の方などにもお茶の文化を楽しんでいただく機会となりました。

本格的な茶席から、おもてなしの心を学ぶはじめてのお茶体験、外国人向け野点など多彩な内容

日本庭園として国の特別名勝・特別史跡にも指定されている、徳川将軍家ゆかりの歴史ある浜離宮恩賜庭園。古くは将軍や公家なども休憩所として利用した「中島の御茶屋」で本格的な茶席が開かれたほか、気軽にお茶の体験ができる「茶道はじめて体験」や、外国人向けの「イングリッシュ野点」、高校生が初々しいお手前を見せてくれる「高校生野点」など多彩な茶席が設けられました。

「イングリッシュ野点」に参加していたブリジットさんは、オランダから仕事で来日。「日本の文化には興味があったのでとてもいいタイミング。初めての茶道は難しかったけど楽しかった」と喜んでいました。ニューヨークから観光で来日したというベンジャミンさんも、「飲む側にもこんなにたくさん覚えなければならないことがあるとは知らなかった。感謝する心というものを感じる」と、日本の伝統文化「茶の湯」に触れた印象を語ってくれました。

お茶を通して、日本の良さを知り、広める

これからの茶文化の担い手である高校生が主体となり運営する「高校生野点」。おもてなしをする高校生は、「お茶をたてている時は、お茶の世界に没頭し、とても穏やかな気持ちになれます。そういう感覚をいろいろな方に体験してもらいたい」とのこと。そんな高校生の所作を微笑ましく見ていた女性は、「お茶を通して日本の良さがよくわか



「東京はとにかく大きな街。東京だけでオランダの人口の2倍も人がいます」と、東京の印象を語ったブリジットさん。(写真手前)

「日本は時間にしても対応してもきっちりしていて気持ちがいい」とベンジャミンさん。(写真右)



るんです。それは海外へ行くと特にそう。お茶には季節の移り変わりや日本の歴史、そして気遣いなど、いろいろなものがつまっているんです。もっと若いうちから始めれば良かった」と笑顔で話してくれました。

“心を育てる” 茶道の精神に触れて

「茶道はじめて体験」では、参加者がペアを組み向かい合って座り、先生の指導のもと、互にお茶をたてあい相手をもてなす作法を学びました。茶道歴60年以上という台東区華道茶道文化協会・小野宗利先生は、「茶道は素直な気持ち、感謝する気持ち、人を大切にする気持ちを学び、表現するものです」と、茶道は“心を育てるもの”と説明してくれました。お茶を楽しんだ参加者は、みな一様に笑顔。そして、穏やかでやさしい気持ちになっている様子。この機会に、お茶に縁遠かった方や子供たちが、その楽しさや奥深さに触れることで、お茶の文化をたしなむ人たちが増えることを期待したいと思います。



高校生がお茶を振る舞う「高校生野点」。「茶道は昔の人たちの考え方がわかって、おもしろい」と高校生たち。



「茶道はじめて体験」では多くの外国人、子供たちも参加。先生方に教わりながらお茶をたてていました。



潮入の池の中央にある「中島の御茶屋」では、本格的な茶席を用意。美しい景色とゆったり流れる時間に、参加された方は「大満足!」とお茶を楽しんでいました。

TERATOTERA

TERATOTERA祭り@西荻窪 西荻映像祭—TEMPO de ART—

Nishiogi Video Festival—TEMPO de ART—

『TERATOTERA祭り 2012』は、JR 中央線高円寺駅から吉祥寺駅区間の各駅周辺をリレー形式で移動しながら開催する大規模展覧会。今年度はテーマに『NEO 公共』を掲げ、震災以降の新たな公共性をアートの力を通して探ることを目的に、前期は高円寺、阿佐ヶ谷、荻窪、西荻窪を舞台に音楽ライブ、屋外展示、シンポジウムなどを展開しました。今回はその中から、西荻窪のまちなかで開催された映像祭をご紹介します。

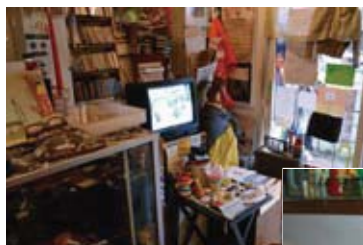
※前期は9月17日～10月14日、後期は吉祥寺で10月20日～11月4日の間、開催。

若手の作品が展示された“西荻”らしい 多彩なお店を探検気分で巡ります

10月3日（水）～14日（日）の12日間、TERATOTERA祭り@西荻窪『西荻映像祭—TEMPO de ART—』が開催され、西荻窪の12軒のお店に8組の若手アーティストの映像作品が展示されました。西荻らしい雰囲気溢れるラーメン屋、古本屋、ヴィンテージショップなど、それぞれの会場に合わせた作品が展示され、多くの方が地図を片手にお店巡りを楽しんでいました。

映像を観るため何度も足を運ぶ人 作品がお店を知ってもらう“きっかけ”にも

西荻窪はアンティークショップの多い街。その一つ「omnivague（オムニバーク）」に展示された泉太郎氏の作品は、商品に紛れて置かれたいくつもの映像インスタレーションを探すというもの。商品である中古レコードの試聴を店主の木間由一さんにお問い合わせすると映像が流されるという作品もありました。レコード別に異なる映像に全て出演している木間さんいわく、「お店とお客さんの距離が近い街ならではの、全映像を観るために何度も足を運ぶ方も現れたそうです。



アンティークショップ「omnivague」では、店内にさまざまな仕掛けを施したインスタレーションを展開。



「商品になりましたスイッチを探すことから作品ははじまっている」と店主の木間由一さん。映像作品は10本。すべて観たお客さんも多数いるそう。



奥田栄希氏のモザイク状の映像作品と、お店の雰囲気が見事に調和していたのが、オリジナルの洋服を扱う「STORE（ストア）」。店主の國時誠さんは「お店のお客さんとは異なる層の方が作品に興味を持ち、お店の存在に気づかれることがたびたびありますね」とのこと。その他、飲み屋街の串焼き屋さんの壁やエスニック料理店の入り口、アーケードの肉屋さんの店先など、映像を探して歩くことが、街を味わうことと地続きになっている、そんな楽しさがある展覧会でした。



有名RPGゲームを主題としたモザイク状の映像作品が「STORE」の雰囲気と見事に融合。足を止め、作品を観る方もたくさん現れました。



毎年6月、まちなかの商店が来店したお客さんにお茶を出す「西荻茶散歩」の発起人でもある「STORE」の店主 國時誠さん。まちを盛り上げるさまざまな活動をしています。

市民参加型アートプロジェクトとしても注目

TERATOTERA 祭りは、「TERAKKO（テラッコ）」と呼ばれるボランティア・スタッフが作りあげる市民参加型のアートプロジェクトとしても注目されています。TERAKKO は企画から作家の選定・依頼、運営のすべてに関わります。『西荻映像祭—TEMPO de ART—』を企画運営した TERAKKO の吉田絵美さんは「権威的に見られるアートを日常に持ち込むことで、面白いものと出合えるきっかけをつくり、日々を豊かにしたい」、宮久実那さんは「アートに興味のない人に興味を持ってもらえるよう、広めていく役割を果たしたい」と、市民が主体になってアートを発信する、TERAKKO の魅力を語ってくれました。

国際会議「文化の力・東京会議」

International Conference “Culture and Social Innovation - Tokyo Conference”

「文化の力で社会変革」をテーマに、国内外の有識者、アーティストを招いて新しい社会像の獲得を考えるプログラム。東日本大震災以降の日本、そして世界でも昨今新たな社会システムの設計デザインが求められています。10月19日(金)、20日(土)の2日間にわたり、分科会及びその報告、基調講演、パネルディスカッションが行われました。

社会における芸術文化の位置づけ 本会議に向けて議論を深めるための 3つの分科会

19日(金)は 窪田研二氏(筑波大学芸術系准教授、キュレーター)、林千晶氏(ロフトワーク代表取締役、米国 NPO クリエイティブ・コモンズ文化担当)、久野敦子氏(セゾン文化財団プログラム・ディレクター)らがそれぞれモデレーターを務め、3つの分科会が開かれました。その議論は20日(土)の本会議にて報告が行われました。

窪田氏がモデレーターを務めた第一分科会『芸術関係者による被災地復興支援—各国事例と持続可能な支援とシステム』では、4名の出演者とともに被災地の変わりゆくニーズと関わり合いながら、どのように現地でアートプロジェクトを行っていくと持続可能な支援になるのか話し合われました。

窪田氏と出演者からは、まず各自の活動についての発表がありました。窪田氏は、筑波大学の創造的復興プロジェクト『CR—Creative Reconstruction』を、アーティストの開発好明氏は、トラックで被災地を巡る『デイリリー・アートサーカス』展や、方言のアーカイブ『言葉図書館』を紹介。アーティストのケーティー・ティアニー氏(アメリカ)は、ハイチでの被災地に家を建てるプロジェクトを、ポーニカン・ワシーノン氏(タイ)は、タイの洪水に際したアーティストの動きを発表。若林朋子氏(企業メセナ協議会 シニア・プログラム・オフィサー)からは、文化による震災復興／支援活動を応援

する基金『GBFund』の紹介後、同基金を通して文化の力や今後の支援の方向性を考えたいとの話がありました。参加者の共通認識として浮き彫りとなったのは、アートプロジェクトの評価軸や活動のガイドラインが必要であること、運用は柔軟さが求められること、現地では、コーディネーターの存在や拠点を持ち発信していくことが重要であることでした。

第二分科会では第一分科会の内容を受け、モデレーターの林氏が『文化芸術の挑戦に持続可能性を付与するフレームワーク』について議論を進めました。既存の仕組みを用いながら新しい発想で現場のニーズを的確に把握し、被災地支援を手掛けた西條剛央氏の「ふんばろう東日本支援プロジェクト」などを例に、文化の本質を問い、文化活動を小さく始めながらスケールを拡大していく柔軟な仕組みのあり方について提案しました。

第三分科会では久野氏がモデレーターを務め、『芸術文化を通して築く国際ネットワーク』と題し、舞台芸術を例にアラブやアジア地域、日本でネットワークをどう築いているか、さらにはネットワークのキーワード「人・モビリティ・拠点」、相互の理解を深め新しい情報を共有する場の重要性について議論を展開しました。カディジャ・エル・ベナウイ氏(AMA*1 コーディネーター、YATF*2 コンサルタント兼プロジェクト・マネジャー)は、様々な困難や規制のあるアラブ地域で、ネットワークを通じて新しい表現で社会変革を目指している現状や、アラブの春以降みられる芸術文化の動向について話しました。

*1 アート・ムーヴス・アフリカ *2 ヤング・アラブ・シアター・ファンド



翌日の本会議に向けて3つの分科会が各々のテーマについて議論しました。



第一分科会のモデレーターを務めた筑波大学芸術系准教授、キュレーターの窪田研二氏。



本会議では、本会議前日に行なわれた3つの分科会の参加者12名から、芸術関係者による被災地復興支援など、分科会での議論の報告が行なわれました。

本会議：アートは社会に対して どんな関わりを持つのか

翌 20 日（土）に行われた本会議では、基調講演として加藤種男氏（東京都歴史文化財団エグゼクティブ・アドバイザー）が、都合により欠席した福原義春氏（資生堂名誉会長）に代わり、福原氏の『文化資本的アプローチで社会をつくる』について概要を説明し、インドから招聘されたルシール・ジョシ氏（映画監督・作家）が、『私たちにアートがあった頃を覚えていますか？』と題して講演を行いました。その後のパネルディスカッションでは、加藤氏がモデレーターを務め、ジョシ氏、ベナウイ氏（前出）、アーティストのスプツニ子！氏と藤浩志氏らが登壇し「文化の力で社会変革」について討議しました。

パネルディスカッションの最初にトピックとして上がったのは、3.11 を機にアーティスト活動を一時休止すると宣言したアーティストのタノタイガ氏が、被災地復興のボランティア活動を若手アーティストと共に始めたことでした。

日本では「アーティストが社会に対して何ができるのか」という議論は 3.11 以降に可能になったのではないかと話す加藤氏。主にイギリスと日本の二拠点で活動するスプツニ子！氏は、イギリスでは普通である社会とアートとの関わりが日本では薄い、3.11 以降の若い世代が社会に疑問を持つようになり、文化の力で社会を変える土壌ができたのではないかと述べました。ベナウイ氏は、どんな立場の人間であろうと現状を世界に顕す機会を持っており、デモへ参加する以外に社会へ介入する方法があるのだと気づかせるために、自分たちの周りで何が起きているのか発信や保存をするビデオの使い方をエジプトの人たちに教えていると話しました。

国際会議に出席した 3 人のアーティストたちをみても、その社会との関わり方や関心は多様です。スプツニ子！氏は、以前と違って作品制作は結果ではなくプロセスをインターネット上に公開して評価させるのが重要と指摘し、自身の作品の殆どはインターネット上のブログや Twitter を通じて制作段階の公開や協力者の公募を行っているを紹介しました。

インド出身のジョシ氏は、70～80 年代にアメリカで学んだアートは、個人性やスキルが重要視されていたが、ポストモダン時代に入って言葉をアートで超えようとしていったと自身のアーティスト活動を振り返りました。「アーナーキーであることは、いわば社会が抱えている宿題をすること」と話しました。

藤氏は、何かを表現しようとする時に、既存の文化やアートの文脈には騙されてはいけない、命題ありきで社会変革のためにアートを使うというのはいずれ、アートというものは庭いじりのように「出来てしまう」ものだと話しました。表現することは今の自分の常識や問題を超えて、変わっていくことなのだと――。

これまで様々な規模の団体・個人が、東日本大震災後の状況を芸術文化を通して捉え直そうと試みてきました。世界各地で社会問題や危機的状況と向き合っている参加者からの発表により知識を深め、これからの継続可能な仕組み作りや評価軸の構築方法について学び、多角的な視点で社会に関わる芸術のあり方について考えることができた充実した 2 日間となりました。

※国際会議の様子は [Ustream](http://www.ustream.tv/channel/tokyokaigi) にてオンラインでアーカイブ配信しています。

<http://www.ustream.tv/channel/tokyokaigi>



基調講演でルシール・ジョシ氏は、自身の体験を踏まえた芸術文化と社会の関わりについて話しました。



震災直前にロンドンから帰国したアーティストのスプツニ子！氏は、「震災前と後では若い世代に明確な変化を感じる。文化の力で社会を変えていくという土壌を、最近は日本にも感じる」とコメントしました。



パネルディスカッションでは、「文化の力」で何ができるのか、今後、アーティストが目指す活動について語られ、大いに盛り上がりしました。

国際招聘プログラム

International Visitors Program

東京の文化の今を世界に向けて発信することを目的に、今年はヨーロッパ、アジア・太平洋圏で活躍する若手のアート関係者や文化人 10 人を招聘しました。彼らは 10 月 21 日(日)から 29 日(月)まで東京に滞在し、さまざまな場所やプロジェクトを視察。帰国後、彼らの目を通した「世界的な文化創造都市・東京」の姿が各国・各地域のネットワークやメディアを通じて発信されるほか、芸術文化を通じた国際ネットワークの強化にもつながっていきます。

多彩な地域からの招聘者が 自らの立場での芸術活動を発表

来日早々の 10 月 23 日(火)には、国際交流基金 JFIC ホール [さくら] にて、招聘者が自国等で展開している活動、プロジェクトを紹介する「参加者プレゼンテーション」が行なわれました。そこでは、ローカルなコミュニティから国際的なプログラムでの活動、専門誌やウェブサイトなどのメディア、芸術文化施設まで、多数の事例が紹介されました。

キュレーター、批評家として活動するヴィルジニー・ポバン氏(フランス)は、パリ郊外の美術や舞台芸術などのレジデンシープログラムの拠点「ラボラトワ・オーベルヴィリエ」における活動を紹介。たとえば、上映禁止映画を持ち寄り、鑑賞後に議論したり、インスタレーションの制作過程を鑑賞者にオープンにする取り組みなど、参加者とアーティストが分野を横断し交流できるプラットフォームが重要と語りました。またポバン氏が共同編集者として取り組む国際的な現代美術キュレーション専門誌『Manifesta Journal』をはじめ、メディアや書籍を紹介しました。

ルイズ・トゥー氏(ニュージーランド/劇作家、演出家、キュレーター)は、オークランドで制作したホームレスを主題にした演劇プロジェクト「Providence」を紹介。自身がサモア諸島出身のマイノリティで、彼らの状況を他人事ではないと感じていたとのこと。自らホームレス向けの炊き出しの列に並んだり、彼らと対話したり、真冬の屋外で寝るなどの体験をしました。



参加者とアーティストが交流できるプラットフォームづくりを行なっている、フランスのキュレーター、美術・舞台芸術批評ヴィルジニー・ポバン氏。

オークランドでホームレスをテーマに制作した演劇プロジェクト「Providence」を紹介したルイズ・トゥー氏。制作にあたっては役者と一緒にホームレスの生活を試みました。



それを踏まえて制作した演劇作品を、ホームレスの人たちだけを対象に上演。最初はやじを飛ばす人もいましたが、皮肉な台詞を面白がって、それからは熱心に観てくれたそうです。

国際フェスティバルでネットワークが生まれる

国内外で高く評価されるチェルフィッチュら日本の演劇カンパニーの招聘経験を持つダグマー・ヴァルザー氏(スイス/スイスラジオ DRS2 舞台芸術番組担当ディレクター、チューリヒ国際舞台芸術祭アター・シュベクターケル プログラムチーム)は、今年から資金不足で活動の場が限られる若手アーティストのため、同国際フェスティバル内で 20 分程度のショートピースを発表できる場が設定されたことを紹介。一般来場者から好評を得たほか、専門家は興味を持ったアーティストにすぐ接触でき、またアーティスト間でも活発に意見交換が行われ、生き生きとした繋がりが生まれたそうです。「国際フェスティバルのやりがい、このようなネットワークが生まれること」と、その達成感を語りました。

最後に実演つきプレゼンテーションを行なったリドゥアン・ザラニ氏(シンガポール/ミュージシャン)は、ポップミュージックから伝統音楽まで、伝統的なマレーの太鼓を使った演奏で人気を集め、世界中でパフォーマンスを行っています。シンガポールという多民族国家が今の自分を形づくったと言うザラニ氏。マレーの伝統的な太鼓を普及させることが、自らの使命だと笑顔で語っていました。



伝統的なマレーの太鼓を使ったパフォーマンスで会場を盛り上げたリドゥアン・ザラニ氏。世界中でパフォーマンスを行っています。

お互いの国やクリエイター、プロデューサーの現状を知る機会としても、国際的芸術祭は効果的だと説明したダグマー・ヴァルザー氏。



ユーロ経済危機が芸術文化に与える影響

プレゼンテーションの最後に行なわれた質疑応答では、ギリシャの財政問題を発端としたユーロ経済危機が芸術文化に与えている影響について質問が投げかけられました。今回、参加者の6割がギリシャを含めたヨーロッパ圏から招聘されており、EU 各国の現状と展望について熱い議論が交わされました。

ギリシャから参加したナターシャ・ハシオティス氏（ダンス批評）は、まず最初に芸術、教育、医療関係の予算が削減の対象になったが、現在では若い芸術家に無償でスペースを提供するなど、自主的にさまざまなサポートが行われていると報告しました。他の招聘者からドイツでは公立劇場の数を半分にしようとする動きがあることなど、EU では軒並み芸術文化部門が予算見直しの対象という意見が出る一方で、EU 全体が保有する資金額はそれほど大きく変わらず、国境、分野を越えた横断的な協働とビジョンの共有に新たな可能性があり、それこそがまさに EU の目的だという意見も出ました。クリストフ・グルク氏（ドイツ／音楽・演劇キュレーター、ドラマトゥルグ）は、「芸術文化は、社会との距離感を縮めなければいけない時。その役割は変革する世界の中で変わっていくのではないか」という議論を紹介し、締めくくりました。



ユーロ危機における芸術分野への予算削減に関してはさまざまな取り組みが紹介されました。クリストフ・グルク氏は「変革する社会において、芸術文化に従事するわたしたちの役割も変わってくる」と、芸術文化は社会との距離感をもっと縮める必要があると述べました。

海外の専門家の眼を通じて 「東京の文化」を見つめ直す

プレゼンテーションに刺激され、終了後も会場では国内の芸術文化関係者らが積極的に招聘者と情報交換を行い、まさにネットワーク作りの場となりました。そうした中で、演劇カンパニー所属の女性は「刺激を受けました。私たちの劇団も海外の大きなプロジェクトに参加するために、助成を勝ち取って頑張りたい気持ちもある。でも今日伺ったような小さな芸術文化コミュニティにアプローチしていくことも興味深い。小規模でも直接的なつながりや作品づくりを探っていきたい」と語っていました。

プレゼンテーションを終えた招聘者一行は、8 日間の滞在中、『フェスティバル / トーキョー 12』『東京アートミーティング（第 3 回）』『Sound Live Tokyo』『東京発・伝統 WA 感動 Traditional+【vol.2】LIVE アニメーションと浪曲』など東京クリエイティブ・ウィークスのプログラムを鑑賞したほか、表参道、六本木、秋葉原を訪れ、東京の現代文化をアート、音楽、演劇、建築、デザイン、写真、サブカルチャーの面から多角的に視察し、関係者と交流しました。

帰国後、招聘者は自らの眼を通した東京の今の文化を伝えていきます。グローバルな視点を持つ若き専門家たちの眼に、東京の姿はどのように映ったのでしょうか。それは私たち日本人にとっても、自らが育んできた文化の豊かさや個性を再認識させてくれることになるのかもしれない。

『東京発・伝統 WA 感動 Traditional+【vol.2】LIVE アニメーションと浪曲』を視察 日本の古典芸術「浪曲」に、自国音楽との共通点

「参加者プレゼンテーション」終了後、招聘者は東京都写真美術館で開催された『東京発・伝統 WA 感動 Traditional+【vol.2】LIVE アニメーションと浪曲』を視察しました。伝統芸能の魅力を現代の視点で再発見することを目的としたこのプログラムは、山村浩二監督のアニメーション作品『頭山』を、浪曲師の国本武春氏がライブで語りと演奏を付けて上映。さらに浪曲の古典も披露しました。日本語による言葉の壁はあったものの、即興を交えながらストーリーを語る浪曲の声や身振りは、自国の音楽に共通する部分もあったとそれぞれ楽しんでいました。

観賞後には、お二人を交えた懇親会が開かれ、招聘者からは作品づくりに対する姿勢や伝統を継承していくことの難しさなど、興味の赴くままに質問が飛び出し、異文化理解を深める有意義な時間となりました。



東京発・伝統 WA 感動

トラディショナルプラス

Traditional+ 【vol.2】 LIVE アニメーションと浪曲

Traditional+ [vol.2] Animation and Rokyoku Live

日本の伝統芸能・文化の発信と継承を目指す『東京発・伝統 WA 感動』の中でも、和の魅力を現代の視点から幅広く紹介するプログラム「Traditional+」シリーズ全3回のうち2回目となる『【vol.2】LIVE アニメーションと浪曲』が10月23日（火）、東京都写真美術館1階ホールで開催されました。今回は、浪曲師 国本武春氏が登場し、自身がナレーションを務めた『頭山』をライブで上演するとともに古典浪曲も披露し、日本の伝統芸能の魅力を“たっぷり”魅せてくれました。

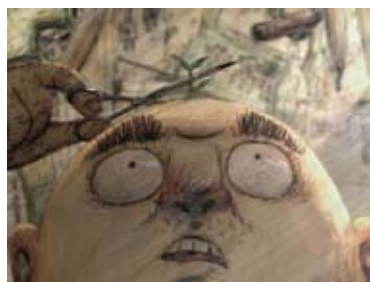
本邦初！浪曲の生演奏で 名作アニメ『頭山』を楽しむ

『頭山』は、山村浩二監督が落語の同名演目を題材に書き下ろしたもので、世界的なアニメーション映画祭で6つのグランプリを受賞した代表作のひとつ。浪曲師 国本武春氏がナレーションを務めたことでも話題になりました。国本氏は従来の浪曲を守りながらも、ロックなどを取り入れた独自の演奏スタイルが魅力で、今や世界で活躍している浪曲師です。その国本氏が弁士となり、ライブでナレーションを行うのは初めての試み。この機会を逃すまいと、会場には幅広い年代の観客が集まり、スタート前から熱気に包まれていました。国本氏は三味線片手に登場するや、まずは浪曲初心者のための“掛け声”講座からスタート。「待ってました！」「たっぷり！」「名調子！」と、観客のウォーミングアップができたところでいよいよ上演開始です。



三味線片手に登場した国本氏。浪曲を楽しむための“掛け声”講座で観客の心を掴んでから『頭山』のライブをスタート。会場内は一変して水を打ったような静けさに。『頭山』という作品の持つ独特の“間”が、三味線の放つ緊張感ある音と見事に調和していました。

『頭山』は、ケチな男がサクラランボを種ごと食べてしまい、やがて頭から芽が出て、桜の大木になってしまうというファンタジックかつ不条理なストーリーの作品です。ふくよかな男を主人公に、ユーモラスに描かれたシーンに合わせギターをかき鳴らすよう三味線を自在に響かせ語る国本氏。



鬼才 山村浩二監督の短編アニメーション『頭山』(2002)。世界的なアニメーション映画祭で6つのグランプリを受賞。

© Yamamura Animation, Inc.



トークセッションで監督の山村氏（写真中央）は、ナレーションが浪曲調になったのはまったくの偶然と、制作時の裏話を披露。左はナビゲーターの小沼純一早稲田大学文学学術院教授。

主人公の男は最後、自分の頭にぽっかりと空いてしまった穴に身を投げ死んでしまうのですが、自分の中に自身が飛び込むという摩訶不思議な展開と世界観に、観客は自然と引き込まれていきました。山村監督は当時を振り返り「国本さんがその場でどんどんセリフを加えていくんですよ（笑）」と、収録現場でのエピソードを語りました。

古典の醍醐味も披露 日本の伝統文化の凄みと面白さを再発見

続いて国本氏は、曲師の沢村豊子氏をステージに招いて三味線を任せ、古典浪曲「若き日の大浦兼武」を披露しました。客席から次々と飛び込んでくる「名調子！」の掛け声は早くも手慣れたもの。舞台と客席が一体となって盛り上がる一幕となりました。観客をグイグイとストーリーに引き込んでいく浪曲師の緊張感、そして一瞬の“間”の魅力。「同じネタでも、同じものは一回もない」と言う国本氏。まさに、日本の伝統文化の凄みや面白さが、新しい文化との出会いで再発見される場面を体験できた貴重な時間でした。



国本氏の相三味線、曲師の沢村豊子氏。音締め（おとどめ）の良さと技術では当代一。

国本氏が得意としている演題『若き日の大浦兼武』。明治のはじめ、のちに警視總監、内務大臣になる大浦兼武が巡査の頃に岩倉具視と出会い、その真面目さ、正義感を認められるという話。



川俣正・東京インプログレスー 隅田川からの眺め

「豊洲ドーム」竣工式／クルージングツアー

Toyosu Dome Public Opening / Cruising Tour

10月27日(土)、3年にわたって進められてきた「川俣正・東京インプログレスー隅田川からの眺め」の最後の物見台「豊洲ドーム」が完成。竣工式が執り行われるとともに一般公開されました。翌日には、川俣正氏とともにこれまでの作品を隅田川から眺めるクルージングツアーも開催。ゲストに北川フラム氏(アートディレクター、アートフロントギャラリー代表)を招き、東京のまちやこれからの時代の美術について対談も行なわれました。

東京の水辺に新名所

「豊洲ドーム」から東京の変化を見つめる

「豊洲ドーム」(江東区)は、平成22年度の「汐入タワー」(荒川区)、平成23年度の「佃テラス」(中央区)に続く「川俣正・東京インプログレスー隅田川からの眺め」の最後の物見台。本事業は、東京文化発信プロジェクトが「東京アートポイント計画」の一環として進めているもので、川俣正氏が木材を利用して地域住民の方とともに制作。そのプロセスと、自らつくり上げた作品からの眺めを通じて、変貌する都市“東京”の過去と未来について考え、東京の魅力を地域および世界へと発信するものです。

竣工式には、川俣氏をはじめ江東区長の山崎孝明氏や高俊興業株式会社 総務事業本部法務部部長の阿部秀行氏、東京ガス株式会社 ガスの科学館 副館長の橋爪良光氏などが列席。列席者により、作品の仕上げを行う意味で、釘打ちにて完成をお祝いしました。

豊洲ドームに足を踏み入れた川俣氏は、「昨日まで資材や工具があったので、きれいな状態でここに入ったのははじめて。木材を組み合わせた壁の隙間から風が入り、移り行く景色も見えて、気持ちいいですね」と満足そう。制作を手伝ってくれた子供たちや地域の方も続々とドームを訪れ、ドームの中に入ると見上げたり、ベンチに腰掛けたり、壁の隙間から外の景色を眺めたりと、思い思いに楽しんでいました。豊洲ドームは刻々と変化するこの景観を、1年にわたり地域の方とともに見つめていきます。



竣工した「豊洲ドーム」。1年に渡り移り行く景観を見つめ続けます。



最後の釘を打ち込み、「豊洲ドーム」が完成。木材を利用し、地域の方と制作しました。



豊洲ドームの制作を手伝ってくれた子供たちも、完成のお祝いに駆けつけてくれました。



壁の隙間から景色を見たり、ベンチに座ったり、子供たちにとっては、早くもかっこうの遊び場に。

美術を志す人にとって、今は絶好の時期

竣工式翌日には、川俣氏と一緒に3つの建造物を隅田川から眺めるクルージングツアーを開催。豊洲ドームの制作を行った地域の方々をはじめ多くの方が参加し、川からの眺めとともに、川俣氏とゲストの北川フラム氏との対談が行われました。

北川氏は、中世や平安末期を例に「世の中の変革期にはおもしろいものが出てくる。今後の日本は今より生きていく条件が厳しくなるが、暗黒の中世からルネッサンスが出てきたように、美術を志す人にとって今の時代はチャンス」と、これからの時代の美術の可能性を示唆し、創作を志す人にエールを贈りました。川俣氏も「人の意見を聞くと何もできなくなる。やりたいことをやってしまう瞬発力みたいなものが必要」と、創作に取り組む姿勢を語りました。



多くの方が参加したクルージングツアー。「汐入タワー」に集合し、隅田川から「佃テラス」、そして竣工したばかりの「豊洲ドーム」を眺めました。



「注目している地域はバングラデシュ共和国の首都ダッカ、東京なら池袋。どちらも混沌としたところがあり、エネルギーを感じる」と北川氏。